

## 平安後期の飛天光背の展開をめぐって

### —滋賀・浄厳院像、同・西教寺像の実査を踏まえて—

津田徹英（東京文化財研究所）

長承三年（1134）、鳥羽・勝光明院阿弥陀像の造立に際し、光背は「飛天光」と定められた（『長秋記』）。名称は光背周縁に飛天を配したことに由来する。光背頂には大日如来があらわされたが、阿弥陀の光背に何故、大日が伴うのか謎であった。

近年、富島義幸氏は、その最初が勝光明院像であり、それ以前の飛天光背の頂には定印阿弥陀が表示されたと論じた（「阿弥陀如来像の大日光背について」『佛教藝術』301、2008. 11）。しかし、天喜元年（1053）の平等院鳳凰堂像の光背頂には補作ながら金剛界大日をあらわす。その鳳凰堂像納置の心月輪に記された阿弥陀大呪・小呪の典拠『無量寿如来観行供養儀軌』には、阿弥陀の観想直後に「如来拳印」を結び、印の威力により密厳世界を極楽浄土に変え、阿弥陀聖衆の集会にまみえると説く。この如来拳印こそ金剛界大日の智拳印に他ならない。光背に大日をあらわす根拠も、定印阿弥陀の出自が金剛界曼荼羅にあることを思うと、阿弥陀の観想に際し、金剛界大日が密厳世界を極楽浄土に変じる役割を担った点に求められよう。鳳凰堂像の光背頂に当初より金剛界大日があらわされた可能性は高い。

ところが、以後の丈六阿弥陀像の作例では、11世紀末の浄厳院像の光背頂には補作ながら胎蔵大日をあらわし、13世紀に至る作例を視野に入れても光背頂の大日は胎蔵が主流であった。12世紀の『覚禅鈔』には僧兼意しんけんいの説を掲げ、金剛界法で阿弥陀を観想し、道場観では大日が妙観察智門に入ることによって密厳世界を極楽世界に変えるとする。阿弥陀の定印が妙観察智印であることを思えば、腹前で両手を重ねる胎蔵大日は定印阿弥陀と同体視されていたことが窺える。この点に光背頂の大日を胎蔵とする根拠が求め得る。

ちなみに12世紀後半の西教寺丈六阿弥陀像の飛天光背の頂には多宝塔を補作するが、塔内の二仏併坐像は当初に遡る。大日の三昧耶形が金胎ともに宝塔であった点に留意するとき、当初も同様とみてよい。ただし、二仏併坐像を伴う点に『法華経』見宝塔品の受容が窺える。その『法華経』では、本経持誦により命終に阿弥陀聖衆にまみえることを説く。造像に『法華経』の反映が認められよう。

一方、飛天にも変遷があった。鳳凰堂像の当初の飛天は、長跪または胡跪とし、雲中供養菩薩が安坐や立像を伴うことと区別する。これに対して浄厳院像の飛天では安坐があらわれ、西教寺像では立像を伴う。その姿に雲中供養菩薩像の受容が認められる。加えて、浄厳院・西教寺両像の飛天には眦えみを下げた咲形なみがたが伴う。咲形は同時代の迎講の菩薩面、高野山有志八幡講阿弥陀聖衆来迎図の乗雲奏楽菩薩に見出せることから、両像の飛天には阿弥陀来迎に伴う奏楽聖衆の性格付与がなされていたとみられる。

このように浄厳院・西教寺両像の飛天光背を視野に入れることで、従来、漠然と捉えられてきた鳳凰堂像以降の飛天光背の展開が具体的に跡付けられ、その存在は等閑視できない。